

高2 難関大 国語



【問題】(演習)

出典：佐藤信夫『レトリックを少々』／青山学院大学 法学部・改

文章略解

レトリックの積極的な意義は、私たちの認識と言語表現の一面性を自覚し、それを克服するように探究していく努力にある。さまざまに想像力をはたらかせてものの見方を多様にしていくことは、他者の立場への、認識的な(思いやり)につながる。その意味で、レトリックとは人を理解するための創造的な行為でもある。異なる文化圏のあいだの相互理解が求められている現代ほど、レトリック感覚の求められているときはない。

解答

問1 ①Ⅱ巧 ②Ⅱ統制 ③Ⅱ暗黙

問2 (エ) 問3 (ウ)

問4 (オ) 問5 (イ)

出典：竹西寛子『日本の恋歌』／立教大学 法学部

文章略解

人間は、事物を事物として成り立たせている本質的なものに限りなく惹かれていく一面を持っている。情を許容する直観的理性を大切にしたい気持ちから、私はそれを「恋」と呼びたい。「夕ぐれは雲のはたてにもぞ思ふ天つ空なる人を恋ふとて」という古今和歌集所収の歌は、特定の人への恋しさを詠みながら、それを超えた限りない憧憬を歌ったものとして、普遍的なものにまで届いていると、私はとらえている。

解答

問1 ① 傾斜 ② 架空 ③ 渴望

問2 (a) 〓め (b) 〓ひ

問3 (ウ) 問4 (イ) 問5 (エ)

問6 甲 〓不特定の、架空に想定される人への限りない憧憬。(23字)

乙 〓事物を事物として成り立たせている本質への渴望。(23字) (いずれも解答例)

問2 (a) 古文では重要語。「めでたし」「めづらし」などという形容詞とセットで覚えたい。

(b) 心ひかれる、という場合には、この字を使うことが少なくない。

問3 本文の後半、「こういう歌がある」(23行目)以降は、「夕ぐれは雲のはたてにもぞ思ふ天つ空なる人を恋ふとて」という和歌

を例として持ちだしての説明である。空欄直前にある「大切なもの」とは、20行目で言う「事物の本質」であり、そこにどう、(空欄A)届いているかといえば、「恋う」という形である。これは「情を許容する直観的理性」(19行目)と言い換えられる。「情を許容しない理性」(18行目)と対比されているのである。だから、(エ)「論理的」の正反対の語、(ウ)の方とわかる。これなら、「感慨がく届いている」の「感慨」とも矛盾しない。

問4 「よく」とは「うまいぐあいに」ということである。上手に問われれば、理解が深まる——これは、授業をはじめとして、学問

の基本と言えよう。また、文脈から考えても、この作者は、「恋」すなわち「直観的理性」によって「事物の本質」に迫ろうと言うのだから、(イ)が正解とわかる。(ア)の「疑問が増える」や(エ)の「理解が曖昧になる」、(オ)の「疑問が生じる」では逆で、「恋」の推奨にはならない。(ウ)は、別に前提として「誤解」があるわけではないから、×。

問5 「情を許容する直観的理性」によるわかり方であるということと、直後から続く「この世、前の世、後の世の秩序のすべての大元締になるものが、微々たる私一個などに易々とつかめるはずはないのである。安直に答えを求めてはならない。」(21～22行目)を根拠とする。

(ア) 「時間をかけて」という問題ではない。「時間をかけ」ればわかるというものではないことは、直後から続く部分で明らかである。
 (イ) 「理性」と「感覚」による「直観」を分けてしまつては、「情を許容する直観的理性」という形で両者を結び付けようとする筆者の姿勢とまったく反対になってしまう。

(ウ) 「予知能力」など論外。

(エ) 「情を許容する直観的理性」を苦し紛れに「感性」と言い換えた選択肢だが、なんとか許容できる。消去法で残る選択肢だ。

(オ) 「情を許容する直観的理性」によるわかり方は「知識」というあり方ではない。それは直観による察知というあり方であって、正確不正確というレベルのものでもない。

問6

まず、「確かにこの一首は、実を結ぶあてもない恋の嘆き、遣る瀬ないもの思いを詠んだ歌なのであろう。」(33行目)に注目する。「一読してそう思う。」とあるとおり、これが第一段階、常識的な理解である。その後「しかし、繰り返し読んでいくうちに」(34行目)と、次の第二段階に移行する。「『天つ空なる人』は、不特定の、架空に想定する人でも不都合ではあるまいと思うようにな」(35～36行目)る。これが、甲。そして「更には」と、第三段階、乙に移行していく。「強いて人と考える必要があるだろうかと思うに至る」(36行目)のである。

これらは、その次の段落でも繰り返される。「特定の人への恋しさを詠みながら」↓「特定の人を超えた何ものかへの限らない憧憬」↓「限らない渴望」といった展開(38～40行目)を対応させる。

【問題】(演習)

出典：田中美知太郎『ソフィスト』一九、悪名の由来／ 青山学院大学 法学部

文章略解

古代ギリシアのソフィストであるアンティポンは、その著『真理』の中で、人が見ているときには人々の「思いなし」である国の法律・習慣を順守し、人が見ていない時は、「真実」を表す自然の本性に従って行動するのが、正しくて道理に適った生き方であると述べている。一方、ソクラテスは、人間は、誰かが見ている見えていないに関わらず、なお正しい行ないを目指すべきであり、それこそが哲学者の求める真実の正義なのであると考えていた。しかし、その時代、ソクラテスはソピステースと同一視されていた。

解答

問1 ① 敬 ② 制裁 ③ 根拠 問2 いまい 問3 (1) ア (2) イ

問4 しかしひと(11行目) 問5 (1) 真実の正義(13行目) (2) ウ

問6 (ウ)

出典：湯川秀樹『湯川秀樹著作集5』／東北大学

文章略解

「科学は人間の役に立つものだ」と多くの人たちは長い間信じてきた。十九世紀までは、人間が自然力を統御することができていたため、このような楽観視が可能だった。しかし現在ではこの自然力が人間の能力を超えて巨大化しつつあり、人類の破滅を招きかねない状況になっている。これは普遍性を旨とする科学が拡大してきた「行きがかり」に関わるものでもあるが、この「行きがかり」を止めるべく努力するのが人類の今後の課題であろう。

解答

問1 人間・自然

問2 ①Ⅱ(エ) ②Ⅱ捨てる(やめる)

問3 ①Ⅱ人間が科学で自然力を制御でき、人類の幸福を楽観できた事態。〔29字・解答例〕

②Ⅱ人間の行使する自然力が人間の意図を超えて巨大化し、人類の破滅が予想される事態。〔39字・解答例〕

問4 科学が人間の知恵の有機的な一環であり、万人を幸福にする普遍的な共有財産として蓄積されてきたこと。〔48字・解答例〕

問1 問題文全体の論旨を読みとつていこうとする際には、中心段落を見抜いていくことと同様に、複数段落にまたがって登場する文言(キーワード的なもの)を探していくことも考えたい。

ここでは、第一段落で「科学が力である」とされた上で、その「力を行使するものは人間である」(3行目)↓「この力は人間が自然の中からみつけ出してきた」という叙述の流れになっていることに注目したい。この「科学(力)」↓「人間」↓「自然」という流れは、次の第二段落(10～11行目)「人間と自然の関係において」「人間の行使し得る自然力」以降にもつながっている。

問2 Aについては、ひとつめの空欄の直前に「人間に対して破壊的に作用するか、人間のために役に立つか」(4～5行目)がわからない……という主旨の記述があることから考える。相対立する二つのものの「どちらでもない」のだから「中立的」ということになる。(ウ)の「相対的」も比較的近い意味の語であるが、これだと「二つのものを相互に比較検討して判断する」というニュアンスに通じてしまい、空欄部分の「どちらでもない」の意味からは少々外れる。(ア)の「無関係」ではさらに的外れ。「関係がない」ではなく、その「関係性」のありよう(内容)が問題なのである。(イ)の「無力」では、そもそもこの部分の主語が「科学」＝「力」であることにそぐわない。

Bについては、空欄の直前に「行きがかり」と述べられていることから考えよう。この「行きがかり」という語は、人間の手の中にある自然の破壊力が「人間の方で間違っていると悟つ」ても「やめられない」という状況を述べる部分で用いられている(22～23行目)。このこととこの空欄の前後とを見比べれば、「やめられなくても、やめるしかない」という内容が推測できよう。筆者(湯川秀樹)の元の文で用いられているのは「捨てる」という動詞であるが、「やめる」というニュアンスが導ければよいだろう。

問3 「同じではない」ことを説明するためには、双方の対比が明確になるように心がけていけばいい。ここではまず①の「昔日」の事態についての説明部分を制限字数以内でまとめ、それを裏返す形で②の説明を書いていくことを考えたい。

①の「昔日」に関しては「十九世紀の科学者」(15行目)の状況を説明した部分に「自然力を人間が制御している」(13行目)と内容がある。ここが核になる。自然力を人間が制御することによって「それが結局人間の幸福の増大をもたらすと信ずることができた」(14～15行目)のである。この二点の内容が含まれた解答ならばOK。

②についての説明部分は、直後にガンの喩えを引いているが、この性質に関しても①を裏返す形で考えていけばいい。「自然力を人間が制御している」状態が崩れた後は「人間の手の中間にある自然の破壊力は、雪だるまのように巨大化しつつある」(19～20行目)のである。ここから「人間が制御できないぐらいに自然力が巨大化した」ことを押さえない。これが第一のポイント。続いては「人間の幸福の増大をもたらすと信ずることのできた」の裏返しを考えよう。これに関しては、「人類を破滅させるガン」(18行目)の部分を押さえない。ここでの「ガン」とは「致命的なダメージをもたらすもの」という喩え。要するに「人類の破滅が起りかねない」ということだ。これが二つ目のポイント。

以上二点が押さえられた解答ならばOK。

問4 傍線部分直前の「その中」とは、「行きがかり」Ⅱ「自然の破壊力の増大」を指している(この「行きがかり」については問2

のBの解説参照)。したがってこの設問は、「自然の破壊力の増大」のどのような点が「科学の本来のあり方と関係」するのか、ということ問うたものと解釈できる。まず「科学の本来のあり方」と(筆者が考えているもの)は何なのか……を考えていこう。

これについては、傍線部分に続く記述が手がかりになる。「本来」……べきである」などの表現を目安にしながらこの段落での筆者の主張を抽出していくと、以下のようになる。

- ① 人間の知恵の一部であるはず(28～29行目)
- ② 全体として人間の知恵の有機的な一環を形づくっている(31～32行目)

要は「人間の知恵の有機的な一環」であるということだ。まずはこの点が押さえられている必要がある。これが前提条件。

では、このことがなにより「自然の破壊力の増大」という今日的な問題に結びつくのか。これに関しては、34行目以下の「古代」との対比について述べられている部分が手がかりになる。「科学知識の蓄積がなかった」(34～35行目) 古代には、「偉大な知恵を持った個人」(34行目)の力で対処することができた。しかしながら、「今日の事態は、もはや少数の個人の知恵だけでは救えない」(35行目)ものになっているのだ。それはなぜか……と考えて問題文を追っていくと、「科学知識の持つ著しい普遍性は、それが本来人類の共有財産たるべく約束されていたことを明示している」(36行目)という記述に至る。この「普遍性」「共有財産」という方向への広がりだが、「破壊力の増大」を生んだことにつながる。この点の指摘もほしい。

以上二点の含まれた解答ならばOK。

出典：『今昔物語集』／二松学舎大学

現代語訳

今となつては昔のことだが、紀貫之という歌人がいたのだった。土佐の国守になつて任国に下向していたのだが、任期が終わる年、七、八歳ほどであつた男の子で、器量がよかつたのでたいそうかわいがつて執着していた子が、(ふとした病気で)数日病んであつけなく死んでしまつたので、貫之はこのうえなく子供が死んだことを嘆き、泣きくずれて、(自身が)病気になるほど(子供を)思いこがれていたのだが、こうして(いつまでも子供の死を嘆き悲しんで)ばかりもいられないので、(ぜひ)上京しようという時に、あの(亡くなった男の)子がこの場所ですらと遊んだことなどが自然と思ひ出されて、ひどく悲しく思われたので、(貫之は)柱にこう書きつけたのだった。

都へと……都へ(帰れる)と思う気持ち(本来は嬉しいはずなのに)辛く感じられるのは、(二度とこの世に)帰つてこない人
 「男の子」が、(都へ一緒に)帰らない人が、いるからだのだなあ

と(詠んだのだった)。(貫之は都へ)帰つた後も、その(子供を亡くした)悲しみの心はなくならないでいたのだった。その(土佐の)館の柱に書きつけた歌は、今まで消えずに残つていたと語り伝えているということだ。

問1 れける程に (本文3行目)

問2 病み付く (本文3行目)

問3 子供の死を嘆き悲しんではかりいること。〔19字・解答例〕

問4 ②

問5 ③

問6 (係りの語) 〓なむ (結びの語) 〓たる

問7 貫之の、子供を亡くした悲しみの心はなくならないでいたのだった。

問8 ②

現代語訳

今ではもう昔のこと、一条の摂政殿（＝藤原伊尹）が住んでいらつしやつた桃園は、現在の世尊寺である。その場所で摂政殿が、季の御読経（の法会）を営まれた時に、比叡山（＝延暦寺）、園城寺（＝三井寺）、奈良の（興福寺・東大寺などの寺々の）優れた学僧たちを選んで招かれたので、（学僧たちは）みな参上したが、夕方の講座を待っている間に、僧たちは並んで座り、ある者は経を読み、ある者は雑談などをして座っていた。

寢殿の南面を御読経所に決めていたので、その御読経所に並んで座っている間に、南面の（庭の）築山や池などがたいへん趣深いのを見て、山階寺の僧の中算が言うことに、「ああすばらしい、このお屋敷の木立は他の所とは比べものにならないなあ」と言ったのを、そばに木寺（＝仁和寺内の諸院の一つ）の基増という僧が座っていて、この言葉を聞くやいなや、「奈良の法師というものは、やっぱり無学な者であるよ。言葉づかいが下卑でいることだなあ。木立とは言うけれども、（中算は）木立と言っているようすなあ。気にかかる言葉であることよ」と言って、ぱちぱちと爪をはじく。中算は、このように言われて、「悪い言い方で申し上げてしまいました。それでは、あなたを小寺の小僧と申すのがよかつたのでしようなあ」と言ったので、居合わせた僧という僧は皆、これを聞いて、大声をあげて激しく笑った。

その時に、摂政殿がこの笑い声をお聞きになって、「いったい何を笑っているのか」とお尋ねあそばしたので、僧たちがありのままに申し上げると、殿は、「これは中算が、そう（あなたを小寺の小僧と申すのがよかつたのでしようなあ、と）言おうとして、基増の前で（あえて）言い出したことなのに、（それに）まったく気づかず、基増が（中算の）計略にひつかかつて、このように言われたのはおろかなことだ」とおっしゃつたので、僧たちはますます笑って、それ以後、（基増に）小寺の小僧というあだ名がついてしまった。「しなくてもよいとがめ立てをして、（かえって）あだ名がついてしまった」と言って、基増は悔しがった。

この基増は仁和寺の僧である。木寺に住んでいたのので、木寺の基増というのであつた。中算は優れた学僧であつたが、またこのように物言いが機知に富んでいた、と語り伝えているということだ。

解答

問 1 (a) ㊦(カ)

(b) ㊦(キ)

問 2 ① ㊦(イ)

② ㊦(エ)

③ ㊦(オ)

④ ㊦(カ)

問 3 (エ)

問 4 (ウ)

問 5 (1) ㊦(エ)

(2) ㊦(ク)

(3) ㊦(ア)

(4) ㊦(カ)

問 6 (ア)・(オ)

解説

問 1 古典特有の知識を問う問題。(a) 山とは比叡山・延暦寺の称。『古今集』の詞書に「山にのほりてかへりまうできて、人人わかれけるついでに」(三九三)とあるのは比叡山・延暦寺のことであるし、天台座主慈円の私家集『拾玉集』には、「世の中に山てふ山は多かれど山とは比叡の御山をぞいふ」とある。(b) 寺とは、比叡山・延暦寺を「山」というのに対する呼称で、三井寺・園城寺をいう。『拾玉集』に「山川の一つ流れの三井の水いかでか末の別れゆくらむ」とあり、もともと延暦寺の別院であったが、内紛により独立したものである。『撰集抄』(鎌倉時代・説話)には「山と寺と中あしき事のありて、山のために寺焼かれ侍りしかば」とあって、争いが絶えず、「山法師」「寺法師」とは両山の僧兵たちのことをいった。

問 2 傍線部口語訳の択一式問題。①から具体的に見ていくとしよう。①を品詞に分解すると「木立／と／こそ／いへ」。「こそ」と「いへ」(已然形係結び)が発見できる。この語法は、結びの部分で意味が完全に切れずに後に続く場合の用法であり、逆接で訳さなくてはならない。よって、(イ)(オ)以外は消去される。では、「こだち」か「きだち」か。5行目「中算がいはいはく、『あはれ、この殿の木立は、……』」に注目しよう。この言葉を聞いた基増という僧侶が6～7行目「物言ひはいやしきものかな」といって「木立」という言い方をとがめて、正しい読み方を語るところだから、「木立とこそいへ、木立といふらむよな。」と言ったのである。したがって正解は(イ)。

②「うしろめたなき」は、形容詞・ク活用・連体形。「うしろめたし」と同義。形容詞「うしろめたし」の語幹に、甚だしい意をあらわす接尾語「なし」がついてできた語。「うしろめたし」は後ろから見ていて、気がかりで不安な気持ちをいう。対義語は

「うしろやすし」（＝安心だ）。現代語「うしろめたい」（＝気がとがめる）の意はもともとなく、中世以降、徐々に増加していき、現在に至っている。ここでは従って正解は(エ)。

③品詞分解すると「申す／＼ばかり／＼けれ」。ポイントは二つあらわれる。一つは「べし」の用法である。現代語でも「べき」（義務）は使用するが、古文では推量、意志、可能、当然、命令、適当、予定を覚えておいて使い分けてもらわなければならない。木寺の基増に誤りを指摘された格好になった中算は、「それなら正しくは……と申し上げるべきであったのですね」と相手に応じている部分。選択肢の(イ)(エ)は仮定表現であり除外。(ウ)「申すようだったのですね」も消去。残る三つのうち(ア)「申した方がいのですね」、(オ)「申すのがよかつたのですね」、は適當の用法で文脈に合っている。(カ)「申さなければならぬのですね」、も義務の用法であり捨てがたい。ここでもう一つのポイント「けり」の用法を確認しておこう。この場合「こそくけれ」という係結びの用法（強意）の他に、口語訳上注意しなければならない点は「けり」の「気づき」の用法である。「けり」は一般に過去の回想や伝聞を表す用法がよく知られているが、これは物語の地の文に用いられる場合の用法である。それに対して、和歌や会話文心内文に用いられた場合は、過去の事実初めて気づいた驚きや詠嘆を表し、（実は）……ただ、……だなあ、と訳出するのである。この場合はもちろん後者に当るので(オ)「申すのがよかつたのですね」、が正解となる。

④「あぢきなく」は、形容詞・ク活用・連用形。「あぢきなし」は、道理に外れていてどうにもならない状態に対するあきらめの気持ち根本にある。たとえば『伊勢物語』の、「人知れず我恋ひ死なばあぢきなくいづれの神になき名負ほせむ」（＝人に知られないで私が恋い焦がれて死んだならば、つまらないことに、「世間の人は」どの神に「そのたたりだなど」と身に覚えのない評判を負わせるだろうか。）のように、つまらない、おもしろくない、情けない、などの基増の心情とみることができよう。13～14行目「～とてなむ、基増くやしがりける」と続く文脈から考えても正解は(オ)以外はない。

問3

傍線部Xの笑った理由を問う問題。笑ったのは「ありとある僧ども」（＝居合せた僧すべて）である。彼らは、山階寺の僧中算と木寺の基増のやりとりの一部始終を聞いていたので一斉に笑ったのである。状況はそう読める。では、どういう性質の笑いなのであろうか。大意を要約してみると、第一段落——一条摂政の邸で、大勢の僧侶たちを招いて仏事が行われていたが、夕方の講座を前に学僧たちは思い思いに憩んでいた。第二段落——邸の南面の庭の木立が美しいのを見た中算は、木寺の基増のそばで聞こえよがしに「木立」という言葉を使う。それを聞いた基増が、中算の物言いをとがめて「木立」ではなく「木立」と言うのが正しい

と訂正すると、中算は待ってましたとばかりに木寺の基増のことを「小寺の小僧」と言い直すので、周囲にいた僧たちはどっと笑った。選択肢を見てみよう。(ア)「中算が基増に悪口を浴びせて逆襲する」は事実と異なる。中算は「悪しく申してけり。」「……申すべかりけれ」のように丁重で慇懃ない回しで応じたのである。(イ)「中算が『小寺の小僧』と理屈に合わないことまでいって」はむしろ逆で、基増の理屈をそのまま受け入れて応じたのである。「自分の間違いを認めなかった」のではなく、本文8行目「悪しく申してけり」(＝悪い言い方で申し上げてしまいました)とあるように、間違いを認めて謝る形をとっている。したがって、これも除外される。(ウ)「中算が……『小寺の小僧』と思わず口をすべらせたようすがこっけい」とある点が矛盾する。既に述べたように、中算は基増の理屈をそのまま受け入れた(計算ずく)のであり、「思わず」ではない。これを除外すると、(エ)が残る。(エ)は、「中算がいった『小寺の小僧』ということばには、単なるしゃれにとどまらない含みが感じられた」とある。周囲の僧たちは、まだこの段階では中算のしかけたからくりを完全に見抜いていたのではなく、何となく感づいたという解釈である。これは次の撰政殿の登場と解説によって明確になる。

問4 傍線部Y「いよいよ笑った」理由を説明する択一式の問題。問3に続いて第三段落を要約してみると、一斉に起こった笑い声を

聞いた撰政殿がわけを尋ねると僧侶たちがあるのままを申し上げる。それを聞いた撰政は、中算がはじめから「小寺の小僧」と言おうとしてたてた計略に、基増がまんまと引っかけってしまったのだと解説してみせる。ここで僧侶たちはますます笑いこぼるのである。これは、「笑い」が増幅していく様子をよく表している興味深い。選択肢を検討してみよう。(ア)「撰政殿の説明のことがとてもおもしろかった」は、面白さの原因を「説明のことば」に限定している点が誤り。(イ)「撰政殿の説明のつじつまが合わない」のであれば、笑いそのものが起きないであろう。(エ)「基増のとがめだてを皆が笑った」のは事実と反する。問3で解いたように、中算の「小寺の小僧」ということばに、含みを感じたために笑ったのである。「中算が平然としていたから」も論外。したがって正解は(ウ)となる。

問5 動詞の活用の種類と活用形を問う問題。傍線部(1)(物語など)し(て)……一般的には「物語す」の形で複合動詞として捉えられることが多い。いわゆるサ変動詞(＝サ行変格活用動詞)の連用形である。活用形の方は、「せ／し／す／する／すれ／せよ」を思い出して解答するのではなく、動詞の接続の知識によって答えを出してもらいたい。連用形に接続する助詞は、「て」「して」「つつ」「ながら」の四つを覚えておこう。傍線部(2)「ぬ(たりける)」の「ぬる」は「居る」である。他に「率(引き連れる)」もあるが意味が合わない。じつとして、座っている、の意で、これはワ行上一段活用。活用形の方は、右と同様接続によって解答してほしい。この場合の「たり」は完了の助動詞なので上接する「ぬ」は連用形である。連用形接続の助動詞は七つ。「き」「けり」「つ」「ぬ」「たり」「けむ」「たし」は必ず覚えておこう。傍線部(3)「(心を)得(ずして)」の終止形は「得」。ア行に活用する動詞はこの一語しかない。ア行下二段活用である。活用形は、助動詞打消「ず」の接続から未然形となる。未然形接続の助動詞は十一ある。「る」「らる」「す」「さす」「しむ」「む」「むず」「ず」「じ」「まし」「まほし」、必ず暗記しておこう。傍線部(4)「(案に)落ち(て)」の終止形は「落つ」。タ行上二段活用である。活用形は傍線部(1)のところまでで覚えているだろう。連用形である。さっそく連用形接続の知識が役立つたわけだが、文法などの暗記物は暗記しただけではだめである。使わなければ忘れてしまうものなのである。

問6 文学史の問題。『今昔物語集』は平安時代後期の説話集であるから、「性格を同じくする」というのはジャンルのことで、説話を選べばよい。(ア)『打聞集』は、平安末期の仏教説話集で、『今昔物語集』『宇治拾遺物語』と内容がかなり重複している作品。著名な作品では決していない。(イ)『往生要集』は、平安中期の仏教書。源信の著。以後の文学に多大な影響を与えた。(ウ)『玉葉集』は、鎌倉末期の勅撰和歌集。京極為兼の撰。(エ)『風雅集』は、室町初期の勅撰和歌集。『玉葉集』を受け、京極派歌風を発展させた作品。(オ)『宇治拾遺物語』は鎌倉前期の説話集。編者未詳。『今昔物語集』を継承し、鎌倉説話文学の代表作とされる。(カ)『栄花物語』は、平安中後期の歴史物語。編年体で記され、藤原道長の栄花を中心に描いている。(キ)『狭衣物語』は、平安中後期の作り物語。『源氏物語』に次ぐ評価を得ている。(ク)『曾我物語』は軍記物語で、原作は鎌倉時代成立といわれる。曾我兄弟の生い立ちから敵討に至る次第を叙した物語。愛読され、後代に大きな影響を与えた。

4章

【問題】(演習)

出典：『今鏡』／オリジナル問題

現代語訳

あまり遠くない昔、男がいた。(ある) 女を愛しく思って、時々通っていたが、(その) 男がある所で、灯火の炎の上に、その女が見えたので、「これは不吉なものとして忌み嫌う(ものだ) そうだぞ。(こういう時は) 火の燃えるところ〔＝灯芯〕をかき落として、その(姿の映った) 人に飲ませる(のがよい) ということだ」と思って、(灯芯をかき落として) 紙につつんで持っているうちに、あれこれ忙しくて、取り紛れることがあったので、忘れて、一日二日過ぎて、思い出すとすぐに、(その女のもとに) 行ったところ、「病気になるって間もなく女は亡くなった」と(家の者が) 言ったので、「すぐに行つて、あの灯火のかき落としておいた物を見せないで(あなたの方を死なせてしまったのは残念なことだ)」と、自分の過ちに悲しく思われて、無常の鬼に(女を) 一口に食われたようならさで、足摺りもしたくなるほど嘆き泣いた時に、「(あなたに) 御覧に入れよと(いうの) でしょうか、(あの方が書かれた) この御手紙を見つきましたよ」と言つて、(家の者が) とり出した手紙を見ると、

鳥部山……もし鳥部山の谷に煙が(立つのが) 見えたならば、(それは) はかなく消えた私(の火葬の煙) と知つてほしいと書いてあった。歌までも灯火の煙のように思われて、たいそう悲しく思ったことは、道理でございます。

解答

問1 ㉑ 過去の助動詞「けり」の終止形

㉒ 動詞「行く」の已然形(または命令形)活用語尾+完了の助動詞「り」の連用形

問2 炎の上に人が見えることは、不吉なものとして忌み嫌うそうだがぞ。

問3 すぐに行つて、あの灯芯のかき落としておいたものを見せないで、あの方を死なせてしまったのは残念だ。

問4 『伊勢物語』

問5 あなたに御覧に入れなさいというのでしょうか、あの方が書かれたこの御手紙を見つけましたよ。

問6 (エ)

問7 (イ)

出典：『今鏡』(昔話第九)より / お茶の水女子大学

現代語訳

たいそう優美(なお話)だと伺いましたことは、いつの(天皇の)御代でございましたでしょうか、そう遠くはない昔の中宮(でいらした)上東門院さまか、陽明門院さまなどでいらっしやっただろうか、近い時代の帝の御代に、(すでに女院となつていらっしやるこの后が)珍しく宮中にお入りあそばし(て御訪問になつ)たときに、月が明るく(照つて)ございました夜で、(この后が)「昔はどのように(月が美しく照つて)ございます夜は、殿上人が管絃の遊びなどを宮中ではいたしました(ものでございます)。そのようなことも(今では)ございませんのは残念に(思われることです)」などと(帝に)申し上げなされたので、(帝が)たいそう決まりが悪くお思いあそばしたときに、(そこに陪席していたある殿上人が)月夜がみごとなので、「凛々として氷鋪き」という(『和漢朗詠集』にある月のみごとさを詠んだ)詩を、たいそう華やいだ声で朗詠しましたのが、格別に(素晴らしく)聞こえましたが、さらにたいそう心にしみいる声で(かつ聞く者が)ありがたい(と感ずるような声)で、無量義経の「微滯みてまづ墮ちて」などという箇所を、声に出して誦みなさいましたが、どれもこれもそれぞれに素晴らしく聞こえたので、(后は)「昔もこれほどの(素晴らしい)朗詠は、聞くことができませんでした。本当に優美な人々が(今も)おりましたことですなえ」と(帝に)申し上げなされたので、(帝の冷)汗もお乾きあそばして、お心持ちも晴れ晴れとあそばしたのだったと聞きました。

後冷泉帝の御代、上東門院さまなどが(宮中に)お入りあそばした(ときのこと)であつたらうか。また、その(朗詠なされた)方々は、伊家の弁、敦家の中將などでいらっしやっただらうかと、(私にこの話をしてくれた)人は申しました。

解答

問1 帝が、昔の宮中の風流さと比較して、現在の宮中の風流さに欠ける様子を暗に指摘されたことで、現在の宮中を代表する身である自分自身が風雅なことに不調法であるといわれたように感じたので。(89字・解答例)

問2 (2) 昔もこれほどの素晴らしい朗詠は聞くことができませんでした。

(3) 帝のお心持ちも晴れ晴れとなさったのだった。

問3

現在の宮中の無風流さを指摘されて、帝が面目を失っているときに、この夜の月の素晴らしさに対して『和漢朗詠集』や『無量義経』の一節を朗々と素晴らしい声で詠じて、風雅に造詣の深い者が現在の宮中にも存在することを示し、帝の面目を保った。

[115字・解答例]

問4

(a) 助動詞・存続(完了)・連用形

(b) 助動詞・尊敬・連用形

解説

問1

「誰の」というのは、文脈を追っていくことで判明する。ここでは、まず「上東門院」か「陽明門院」かははっきりしないもの(後文では、「上東門院」の方を語り手はより確からしいと思っただが)ともかくもこの女院が珍しく宮中を訪問したと書き出されている(「めづらしく内にいらせ給へりけるとき」。そして、その女院が「むかしは」とある人物に語ったというのである。ではこの人物とはだれか。宮中にいて女院の相手をするのに相応しい人物で、かつ「思し召す」という尊敬語の対象になる人物、となれば、帝以外には考えられないだろう。後で「御汗」「御心」と尊敬語が使われていることから、そう考えるのが自然である。つまり、「誰の」に相当するのは帝である。諸君の中には、このところを反対に考えて、帝が女院に「むかしは」と言ったと理解した人もいるかもしれないが、「後冷院」に関する注に、後冷泉院は上東門院のもとで成長したとあることからすれば、帝の方が年下であると捉えなければならぬ(この話の帝と女院を後冷泉院と上東門院に決定するかはともかく、語り手は女院の方が年上だと考えて話しているということである)。したがって、「誰の」に対する答えは、帝となる。

次に、その理由だが、これは直前に「已然形+ば」があることに注目する。この「已然形+ば」は「〜なので」と《原因・理由》の意味で訳せるので、傍線部の理由としてはこの箇所(「むかしは……申させ給ひければ」を使うということである。

では、具体的にその内容を検討してみよう。女院が言った発言の内容は「昔はこんなに月が美しい夜には殿上人が管絃の遊びな

どをしたものなのです。今はそのようなこともなくて残念です」というものである。したがって、「昔は月の美しい夜には殿上人が管絃の遊びをしたが、今はしないことを残念だと言われたから」というのが、一応の答案にはなる。しかし、ここでやめてしまつては元も子もない。右の答案は、あくまでもスタート地点であつて、最終的なゴールではないのである。模範解答と右のような答案を見比べてみて、「半分くらいは点数が取れてそうだから、まあいいや」などと思つてはいけない。諸君の目指すような難関大を受けるくらいを受験生であれば、このくらいのことでは誰でも書くと思つてよいからだ。ほとんどの受験生が書く答案を書いてみても、合格できないのは当たり前であらう。そういう意味で言えば、右の答案はまだ零点に等しいものでしかないのである。

そこで、右の答案を磨き上げていくことが必要となる。まず、注意したいのが、何故右のようなことを言われて帝が恥ずかしがらなければならぬのか、という点である。ここから先は古典常識（ないし一般常識）の領域に入るが、帝というのは何も政治的行政的な存在というに限らない。むしろ、政治的にも経済的にも文化的にもあらゆる面で世界の中心にいるのが帝という存在なのである。それゆえに、天変地異は帝の失政に対する天の怒りと解釈された（もっともこれは中国的な発想だが）のであり、宮中で様々な年中行事を主催するのが帝にのみ許されていた（これは帝こそが世界の運行を司るという理念ゆえ）のである（したがって、臣下が年中行事を主催するなどということは基本的にとんでもないことなのであり、逆にそこから光源氏の王者性が垣間見えたりもするのだが）。そのようなことから考えれば、月の美しい夜に管絃の遊びをしていないというのは、帝の帝としての資質が大いに問われていると解釈してよい。昔はしていたが今はしていないというのは、文化面での衰退であり、その責任は帝にあるという論理が、女院の発言の背後には潜んでいるのである。言い換えれば、この発言は、単に今と昔を比較しただけではなく、そのことを通して帝の資質を非難するような内容を含んでいたということになる。また、だからこそ、帝は「いとほづかしく」思つたのである。答案にはぜひこの点についての言及がほしい。

また、そのことと関連して、「月の美しい夜に管絃の遊びをする」という行為に対してもう少しはつきりとした規定がほしい。これが「風流」ないし「みやび」な行為であるからこそ、それを行わないことが帝の恥になるからである。

問2

(2)を逐語訳していく際のポイントは、「えゝざり」である。「え」は打消表現と呼応して、「ゝできない」という《不可能》を表す呼応（＝陳述）の副詞である。この点及び、丁寧語の「侍り」に注意して傍線部を逐語訳すると、「昔もこれほどのことは、聞くことができませんでした」となる。その上で、「これほどのこと」という指示語の処理をするわけだが、これは直前の「凛々と

して氷鋪き」と「微滯まづ墮ちて」の朗詠を指している。そのことは傍線部直前の「いづれもいづれもとどりどりにめでたく聞こえければ」から明らかであろう。それゆえ、右の逐語訳にこの点を付け加えて答案とする。

(3)を逐語訳するのに難しいポイントは無い。「せ給ふ」には文法上、「しさせなさる」などと訳す《使役+尊敬》の場合と「しなさる」などと訳す《尊敬+尊敬》の場合があるが、この場合は後者である。帝に対する《最高敬語》を表している。逐語訳は、「お心も広がりなさったのだった」となる。「心が広がる」が少しわかりにくいので言い換えが必要だが、これは無風流を指摘されて小さくなっていた帝の心がほっとして緊張が解けたということなので、「晴れ晴れとなる」などとする。次は主語の明示だが、「御」とあるようにこれは帝の心である。したがって、「帝のお心」として答案とする。なお、諸君の中には「帝の心」とした人もいたかもしれないが、不用意に「お」を落とさないように注意しておこう。

問3

この話に登場する人物は、帝と女院と「凜々として氷鋪き」や「微滯まづ墮ちて」を朗詠した者たちしかない。とすれば、伊家の弁や敦家の中将がしたことは、これらの句を朗詠したということである。しかし、問1同様、それをどのように書くかがこの設問のポイントなのである。「なんとなくこういうこと」という漠然とした理解ではなく、明確にこの話における彼らの役割を指摘できないと、この問題を解いたことにはならない。

問1で解説したように、この時の帝は女院に宮中の無風流さを指摘されて恥ずかしく思っていたのであった。そういう状況下での朗詠であるから、これは単なる朗詠ではなく、今の宮中にも風流を解する者がいることを示す行為であり、またそのことにより窮地に立たされていた帝を救う行為でもあったことになる。答案にはぜひともこの点への言及が必要である。この点を中心にして、後は具体的な状況を説明すればよい。「無風流さを指摘されて帝が困っていた時」であること、『和漢朗詠集』にも採られた有名な詩の一句や『無量義経』の一説を朗詠したことなどが指摘できていればよいであろう。

問4

(a)「り」は《存続完了》の助動詞「り」の連用形である。この助動詞は連体形の「る」と已然形及び命令形の「れ」が、《自発・可能・受身・尊敬》の助動詞と紛れやすいので注意が必要。しかし、見分け方は簡単で《存続完了》の助動詞は「サ変の未然形・四段の已然形」に接続するのだが、それは要するに母音「エ」にしか付かないということである。それに対して、『自発・可能・受身・尊敬』の助動詞「る」は母音「ア」の次にしかこないのである。この点さえ覚えておけば、両者の識別に迷うことはな

い。

(b) 「れ」は《自発・可能・受身・尊敬》の助動詞「る」の連用形である。具体的な文法的意味の識別だが、「誦む」というのは心の働きに関する動詞でもないし、ここは無意識のうちに朗詠しているのもないので《自発》ではない。また、打消表現を伴っていないので《可能》でもない。いわんや、「くされる」という意味にはならないので、《受身》でもない。ということ、残った《尊敬》が正解となる。

《古文補充問題》

現代語訳

問1 (1) 大勢見えていた子どもたちに似ているようでもなく、

(2) 不思議に思っ、近寄って見ると、筒の中が光っている。

問2 (1) (a) 難波の港に着いて、河口に入る。

(b) 力をも入れることなく、天地を動かす。

(2) (a) 情趣を理解しない我が身にも趣深さは自然と感するものだ。鳴が飛び立つ沢の秋の夕暮れの情景には

(b) 楽器を手に取ると音を立てようと思う。

問3 (1) 時雨の降る夜には、少しの間も忘れることなく恋しいことです。

(2) ある人に誘われもうしあげて、夜が明けるまで月を見て回ることがありましたが、

問4 鎧の上に、重いものを背負ったり担いだりして、(海に) 飛び込むと沈む。

解答

問1 (1) 見え・ヤ行下二段・連用形 似る・ナ行上一段・終止形 あら・ラ行変格・未然形

(2) あやしがり・ラ行四段・連用形 寄り・ラ行四段・連用形 見る・マ行上一段・連体形

光り・ラ行四段・連用形

問2 (1) (a) 自動詞・ラ行四段 (b) 他動詞・ラ行下二段

(2) (a) 自動詞・タ行四段 (b) 他動詞・タ行下二段

問3 (1) 補助動詞 (2) (a) 補助動詞 (b) 動詞

問4 負う・ウ音便・負ひ 担い・イ音便・担ぎ

出典：『晏子春秋』卷五「内篇雜上」／立命館大学 経済学部 85年

書き下し

晏子齊の相と為りて出づ。其の御の妻門間より闕ふ。其の夫、相の御と為り、大蓋を擁し駟馬に策ち、意気揚揚として甚だ自得するなり。既にして帰る。其の妻去らんことを請ふ。夫、其の故を問ふ。妻曰はく、晏子長六尺に満たず、身は齊国に相となり、名は諸侯に顕はる。今者妾、其の出づるを觀るに、志念深し。常に以て自ら下る者有り。今子長八尺、廻ち人の僕御たり。然れども子の意自ら以て足ると為す。妾是を以て去るを求むるなりと。其の後夫、自ら抑損す。晏子怪みて之を問へば、御実を以て對ふ。晏子薦めて以て大夫と為す。

現代語訳

晏子は齊の宰相となつて（ある時、用事があつて）外出した。（このとき、晏子の）御者の妻が門のすきまから（夫の様子を）こっそりのぞいて見た。その夫は宰相の御者として、大きなかさを抱え持ち四頭立ての馬にむちを打つて、意気揚々として大變得意そうであつた。しばらくして（夫が）帰つてきた。（そこで、）その妻は、どうか（離縁して）夫の元を去らせてくださいと願ひ出た。夫は、その理由を尋ねた。（すると）妻は言った、「あなたの主人の）晏子は身長が六尺にも足りない小男でありながら、齊国の宰相となつて、その名は諸侯の間に知れわたつています。今、私が晏子の外出するご様子を見ますと、高い志を持っているようです。（それに）いつもへりくだつた態度でいます。（ところが）あなたは身長が八尺もの大男でありながら、晏子に仕える御者です。（しかも）あなたの心は（下僕であることに）満足しているようです。私はこういうわけで離縁をお願いしたので」と。その後、夫は自分をおさえて謙虚にしていた。晏子がそれを不思議に思つて理由を尋ねると、御者はありのままを答えた。（それを聞いた）晏子は、御者を推薦し

て大夫に取り立てた。

解答

問 1 (a) 〓 しよう (しゃう) (b) 〓 ここをもつて (ここをもつて) (c) 〓 こたう (こたふ)

問 2 (ア)

問 3 (ウ)

問 4 みづ (ず) からもつ (つ) てたるとなす / みづ (ず) からもつ (つ) てたれりとなす [別解]

問 5 去 (本文2行目)

問 6 御者が妻に言われた非を認め、改めたから。 [20字・解答例]

御者が己の欠点を直そうと努める男だから。 [20字・別解例]

書き下し文

賈魏公相たるの日、方士有り、姓は許。人に対して未だ嘗て名を称せず、貴賤と無く皆我と称す。時人之を許我と謂ふ。言談頗る採るべき有り。然れども傲誕にして、公卿を視ること蔑如たり。公見んと欲し、人をして邀召せしむること数四なるも、卒に至らず。又た門人をして苦だ之を邀致せしむ。許驢に騎りて徑ちに丞相の序事に造らんと欲す。門吏之を止めて、可とせず。吏曰はく、「此れ丞相の序門なり、丞郎と雖も亦た須らく下るべし」と。許曰はく、「我丞相に求むる所無し。丞相我を召して来たらしむ。若し此のごとくんば、但だ須らく我去るべきのみ」と。驢を下らずして去る。門吏急ぎ之を追ふも還らず。以て丞相に白す。魏公又た人をして謝して之を召さしむるも、終に至らず。公嘆じて曰はく、「許は市井の人のみ。惟だ其の人に求むる所無きものすら、尚ほ勢を以て屈すべからず。況んや其の道義を以て自ら任ずる者をや」と。

現代語訳

賈魏公が宰相であった頃、許という姓の方士がいた。他人に向かって一度も自分の名前を名乗ったことがなく、身分の上下を問わず、誰に対しても「おれ(我)」と称していた。そこで当時の人々は、かれのことを「許我」と呼んでいた。許の言葉や話には非常に傾聴に値するものがあつた。しかし、勝手気ままな性格で、高位高官の人に向かってでも馬鹿にするような態度をとつた。賈魏公は一度この許に会いたいと思つて、何度も人を迎えにやつて招いたが、結局やつて来なかつた。さらに食客をやつて根気よく招いたところ、許は驢馬に乗つて、まっすぐ宰相の執務する役所に入ろうとした。門番が許を制止して門の中に入れさせなかつた。門番は言つた、「ここは宰相殿の役所の入口である。次官であつても乗り物から下りなければならぬのだ」と。許は言つた、「おれは別に宰相に用事は無いのだが、宰相がおれに來いといつたのだ。そう言うのなら、おれは帰るだけだ」と。(そして)驢馬にまたがったまま立ち去つてしまつた。門番は急いで彼を追いかけたが、(許は)戻つて来なかつた。(門番は)このことを宰相に報告した。魏公はまた人をやつて詫びを言わせ、許を招いたが、(許は)とうとうやつて来なかつた。公はため息をついてこう言つた、「許は名もない民間人にすぎない。

だが、彼のように無欲で名利を欲しがらない人間は、やはり力づくで抑えこむことはできない。まして、道義を重んずる人間と自認する人を権勢で支配することなど、全く不可能なことだ」と。

解答

問1 (ウ)

問2 (オ)

問3 (エ)

問4 (イ)

問5 (ア)

問6 (ウ)

解説

問1 理由説明問題。時人(＝その時代の人)が許を「許我」と呼んだ理由は、直前の一文に書かれている。すなわち、許が「対人未嘗称名、無貴賤皆称我」ということをしていたから、ということになる。この文を現代語訳してみると、「人に対して、今まで一度も自分の名を称したことはなく、『貴賤』(＝身分の高低)に関係なく『我』(＝おれ)と称していた」となる。「貴賤」は、冒頭の「人に対して」から、相手の「貴賤」であり、つまり、許が、相手の身分の高低に関係なく『我』と称していたから、ということになる。これに該当する選択肢は(ウ)。

(ア)は、「名をもたなかった」が不可。本文では「名を称したことがない」と言っているだけである。(イ)・(オ)は、「貴賤」を「出世」と解釈している部分が不可。残りの選択肢のうち、(カ)は、誰の「身分のちがいがい」なのが本文からは読みとることができない。また、(エ)は許が他の者に対してしたことについて書いてあるが、直前の文には「すすめる」に該当する動詞も、使役の表現もない。

問2

接続表現と再読文字の知識を問う問題。しかし、話の流れがわかれば簡単に解ける。傍線部(2)の前後の内容から、「下」の意味を限定すれば良い。本文3・4行目に「許騎驢」とあり、6行目に「不下驢而去」とあることから、許はロバに乗って、賈魏公(丞相)の所に来たのである。つまり、ここでは「下」は、「(ロバから)降りる」の意味で使われていることがわかる。

「下」の読み方は、まず、「下^ル」（5行目）、「下^ッ」（6行目）と送りがながふつてあることに着目しよう。「下^ル」の方は「べし」「須」の二度目の訓に接続していることから終止形、「下^ッ」の方は「ず」「不」の訓に接続していることから未然形である。つまり、四段活用をしているから、「くだル」と読むことがわかる。「オル」と読むならば上二段活用ということになる。

さて、選択肢のうち、「下」を「（ロバから）降りる」という意味で解釈しているものは、(オ)だけ。この場合の「下」は自動詞だから、「下ろす」と他動詞で取っている(ウ)・(エ)・(カ)は不可。「須」に使役の意味はない。

「雖^{いへば}」には、「〜けれども」という逆接確定と、「〜だとしても」という逆接仮定の二つの用法がある。ここでは、「雖」の上に主語が置かれていないので、逆接仮定である。「須^{すべからず}」……〔終止形〕は、当然の意味を表し、「ぜび……ねばならない」と訳す。

問3

多義語と読み方の知識を問う問題。まず「如^{ごと}此^{かくのごとし}」は「如^{ごと}此^{かくのごとし}（かくのごとし）」と読む。普通「此」は「これ」「ここ」などと読むが「如^{ごと}此^{かくのごとし}」は、慣用的にこう読む。そこで、(ア)「このごとき」(イ)「このごとき」(ウ)「これにしかば」(オ)「これにしかば」はすべて不可だとわかる。残った(エ)と(カ)のうち、(カ)の「わかきこと」は、この場合文脈から「若い」に当たる語句は見つからないので不可。したがって正解は(エ)。

「若」は、大変多くの意味を持つ語である。読み方・意味・品詞をセットで覚えておき、文中での位置を見て、そこに位置することのできる品詞を考え、その品詞の意味をあてはめて前後とつながるかを検討する。

問4

主語判定の問題。文脈を追えば難なくわかる。直前の「門吏急追之」の「之」は、「不^レ下^レ驢而去」という行動をとった人物、つまり、ロバを降りずに立ち去っていった「許」と判断できる。「不^レ還」とは、「戻って来ない」ということだから、すなわち賈魏公（丞相）の門から立ち去った「許」（＝イ）が正解。

問5

漢字の意味を熟語で問う問題。「謝」には様々な意味があることが、選択肢を見てもわかる。ここでは、賈魏公（丞相）に呼びよせられた許が、ロバを降りると言われて帰ってしまったという状況が前提となっている。そこで魏公すなわち丞相が「使人謝而召^レ之」という行為に出たわけである。「召（呼び寄せる）」対象である「之」は当然許のこと。すると「謝」というのは許

に対する行為であり、前提となる状況から考えると、「あやまる」つまり「謝罪」の意味で取るしかない。この意味を持つ熟語は(ア)「陳謝」。「陳」は「述(べる)」という意味で、「謝(罪)」を「陳(べる)」ということ。(イ)「感謝」(オ)「謝恩」(カ)「謝礼」の「謝」は、「礼を言う」(エ)「謝絶」では「ことわる」(ウ)「代謝」では「去る・おとろえる」という意味を表す。

問6

理由説明問題。理由の根拠は、本文7行目「公嘆曰、」以下の、賈魏公の言葉の中にしかない。まず大まかに捉え、賈魏公は方士である許に対して肯定的な評価をしたのか、否定的な評価をしたのか、を考える。何度も許に会いに来るように言っていることから、肯定的な評価をしていると予想できる。そこで、一文、一語句の意味を丁寧に追っていく。その際、この問題の解答は選択肢から選ばよいのだから、選択肢の内容をその文に代入して意味が通るか考えてみるのがよい。

最初に「許市井人耳」とある。これは「市井人」がポイント。「市井の人」というのは、「街中にいる人」、つまり賈魏公の様に「官」ではなく、「民」のこと。(ア)から(カ)までの選択肢はすべて「民間人」としているから、大事なものは「民間人」の修飾部分の比較ということになる。この「民間人」というのは、当然この話の中心人物である許のことだから、許の人となりによりに妥当しないものがまず省かれる。すると、(イ)の「知識を求める意欲のない民間人」は、本文とは関係ないので消去できる。

さて、次の公の言葉で、「スラ尚ホ——、況ンヤ……ヲ乎」という語句に着目しよう。これは、「抑揚」の句形である。まず「〜で——さえも——である」と、程度の低い(軽い)例をあげておいて、次に「まして……はなおさら(——である)」と、高い(重い)場合を強調する言い方である。このとおり訳してみると、公の言葉は、「人に何かを求めようとするのではないというだけの人でさえも力で押さえつけることはできない。まして(それよりも人格の高尚な)「以道義」「自任者」はなおさら(力で押さえつけることはできない)。」と言っていることになる。この直訳に最も近いのは(ウ)である。

(ア)は、「道義を信条とする」のが「知識人」とは本文に書かれていない。

(エ)の「名の知れわたった民間人」と「道義ある人」の比較はおかしい。また、公の言葉に「他人の評判を気にする」に該当する語句がない。さらに、「市井の人」は有名人(「名の知れわたった民間人」ではない。そこいら辺の人という意味なのである。

(オ)は「ひとたび他人から期待されなくなると自暴自棄となつて」とあるが、これに該当する語句が公の言葉の中に見つからない上に、本文中の許の行動を「自暴自棄」とするのは無理がある。

また(カ)には「弁舌のすぐれた人間」とあるが、許は別に弁舌がすぐれていたわけではない。

《漢文補充問題》

解答

問1

① 4_レ3_レ2_レ1_レ7_レ6_レ5

② 9_下5_下6_下2_下1_下4_下3_下8_下7_下

問2

① 3_下1_下2_下4_下8_下5_下7_下6_下

② 9_下7_下6_下1_下3_下2_下5_下4_下8_下

問3

① 書き下し文 李白且（よ）に酒を飲まんとす。

(現代語訳 李白は今にも「これから」酒を飲もうとする。)

② 書き下し文 李白未だ嘗（か）て酒を飲まずんばあらず。

(現代語訳 李白は今まで酒を飲まないことはなかった。「必ず飲んだ」。)

③ 書き下し文 李白の妻李白をして酒を断たしむ。

(現代語訳 李白の妻は李白に酒をやめさせた。)

④ 書き下し文 李白の妻李白の欺く所と為る。

(現代語訳 李白の妻は李白にあざむかれた。)

⑤ 書き下し文 李白必ずしも詩を作らず。

(現代語訳 李白は必ずしも詩を作っているわけではない。)

⑥ 書き下し文 李白詩を作らざるべからず。

(現代語訳 李白は詩を作らなければならない。)



会員番号	
------	--

氏名	
----	--